

---

# 命の灯火が消える前に

聖司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

命の灯火が消える前に

### 【Nコード】

N0365A

### 【作者名】

聖司

### 【あらすじ】

余命一週間の告知を受けた神童祐はその一週間をどのように生きるか悩む。そして幼なじみの東条葵が祐の一週間に大きく関与する。

## 第1話 7日間の命

自分の命がたった一週間と言われたら……あなたはどうしますか？  
一年でも、一ヶ月でもない、たった一週間だったら……  
あなたは、その一週間をどう生きますか？

9月18日

信じられなかった、ただ学校で倒れただけだったのに、ただの貧血だと思っていたのに、先生に病院に連れていかれて、俺は、思いもしない事を聞かされた。

すい臓ガンだった……

「よくもここまでほったらかしにしたもんだ、いくら自覚症状がほとんど無いからといっても、ひどい腰痛やらなにやらあっただろうに」

確かにあった、貧血も今回だけじゃない、背中やみぞおちが痛み、眠れない日もあった、意味もなく下痢をしたり、ダイエットをしている訳もなく、体重が減った。

規則正しい生活をしていた訳じゃない、自分の体調が悪いのは生活の乱れと勝手に解釈していた、俺は、自分の今までの生き方を呪った。

「家族への連絡は私がしておこう、いいね？」

大学病院の先生が何か言っている、だがそんな話を聞いているほど俺は冷静じゃなかった。

「神童 祐君？ 聞いているのかね？」

「……なんですか？ 先生？」

「だから、家族への連絡は」

「家族には……黙っててもらえますか？ 心配かけたくないんですよ」

「そうか、でも必ず自分から言うんだぞ」

ウソだった……心配かけたくない、こんな理由じゃない、ただ認めたくない、それだけだった。

「ひとつ聞いていいですか？ 俺の寿命ってどのくらいなんですか？」

「はつきり言おう、長くても一週間だ、短くて」

ショックだった、医師の話だと一週間は理想であり、実際は一週間もない、短くて三日、早すぎよ。

9月19日

朝だ、いつもと変わらない朝、今日も学校に行かなくちゃならない。

「祐、朝ごはんよ、早く食べなさい」

母さんも知らない、俺の病気の事を。

「なにボウッとしてるのよ、早く食べないと遅刻するよ」

「ごちそうさま、俺もう行くよ」

「ちよつとしか食べてないじゃない、具合悪いの？」

「べつにそんなんじゃないさ、早く行かないと遅刻するだろう？」

そして俺はお気に入りのスニーカーを履いて家を出た。

「……実感ないな、病気なんて」

学校に向かって歩きながら色々な事を考えた。

俺はまだ十五歳だ、やり残した事なんて山ほどあるはずだ、でも今はやりたいことなんて何もない、それが何よりも虚しい、そして哀しい。

「ゆーくん、おはよう」

後ろから思いつき誰かに押された、不意の事に驚いてしまい、かなり情けない感じだった。

「うわっ！ 葵か、おどかすなよ」

隣に住んでいる、東条 葵、俺と同じ年で小さい頃からいつも一緒に遊んでいた、つまり幼なじみという事だ。

「どしたの？ 祐君？ なんだかボ〜っとしてるよ」

「別に何でもないよ、急げよ、早くしないと遅刻だぞ」

「自分が一番ゆっくりじゃない！ 急げはこっちのセリフだよ」

「うっさいよ、俺はいいんだよ、ほら葵、早く行けよ」

「んじゃ学校でね！ バイバイ」

「おう……」

葵、俺が死んだら悲しんでくれるだろうか？ ……やめよう、考えても悲しくなるだけだ。

学校、俺は学校行く意味あるのか？ でも、サボってもする事がない。あと二日で俺は死ぬかもしれないでも何をする気にもならない。

いつの間にか、教室に着いていた。やる事がないから窓際が一番後ろの自分の席に座る。

「どうした、貧血ボーイ、今日も朝から具合悪いのか？」

前の席に座っている高木が一人でハイテンションに騒いでいる。

「うるせーよ高木、親友の体調が悪いってのに、一人騒いでんじやねーよ」

高木 宗一、中学からの付き合いで世界一のダチだ。

「そっぴいやお前さ、学園祭なにやるんだ？」

「いきなりなんだよ、学園祭？ なにもしねえよ」

「やっぱりそうか、なにもしないつもりだったか。なら丁度いい、お前さ演劇やれよ」

何を言ってるの？ って感じだった。演劇？ 冗談じゃない、学園祭は今日から一週間後、その時には俺は居ないだろう。それに一

週間でセリフや動きを覚えられるか？ 否、無理だろう。

「一つだけ言つとくぞ、一週間でなにをしろってんだ？ セリフ覚えられるか？」

「そこは大丈夫だ、お前にセリフはない！」

「……は？」

「お前は居るだけでいいキャラを演じるのだ」

「帰れアホ、俺じゃなくてもいいじゃねえか」

「お前しかいないんだよ、ヒマなヤツはよ、みんな今年、はりきっちゃってさ、ヒマなヤツいねえんだよ」

だからって、なぜ俺なんだ？ いっそ病氣のことを話して全ての面倒ごとを捨てたくなってくる。

「放課後すぐに体育館な！ よろしく」

……ミスター無責任。それが中学の時の高木のあだ名だった。

授業も一通り終わっていつもだったらすぐ帰るんだけど……一様、体育館にむかった。

気が乗らない、やる気がでない、というよりセリフが無いキャラって要らないだろう。

そんなくだらない事を考えてるうちに体育館の前まで来てしまった。この一線を越えたらもう後にはひけないだろう。さあ、どうするか……

「なにしてるの？ 祐君？」

背後からの朝に聞いたのと同じ声……葵だな。

「どうしたんだ？ 葵こそこんなところでさ」

「演劇の練習だよ、あ！もしかして祐君、役者やってくれるの？ そうだよな、ありがと、さあさあ中に入って入って」

葵に強引に連れられて体育館の中に入ってしまった。セリフなしのキャラをやらされるのか……

「祐君さ、一つしか役空いてないけどいい？ 恋人のキスを見てい

る通りすがりの歩行者のひとりなんだけどさ」

なんだそれ、必要なのか？ メチャクチャな人物だな、想像して  
たよりひどい。

「必要なのか？ その役？ いらねえだろう」

「必要……って言うより、誰かがケガとかした時の代役みたいなさ」

「……わかったよ、ただの代役なんだな？ んじゃ、出番こねえな」  
「やってくれるの？」

「いいよ、別にさ、誰もケガなんかしねえだろう」

「出番こないとは限らないんだからね！ 練習にはきてよね！」  
「わかったよ」

葵との話が終わった後すぐに練習が始まった。さつき台本見て知  
ったが学生の恋人同士が結ばれるって話らしい。やる事がないから  
俺はただ劇を見ているだけだったが、俺は初めて葵が恋人役だとい  
うことに気付いた。

「この劇の最後ってさ、キスシーンで終わるんだったつけ？」

今日、キスシーンもやるのだろうか？ 何故かそんな事を俺は考  
えた。

「なに考えてんだろ俺……バカみてえ、相手役誰だろ？」

気になった、まだ相手役は練習に来ていないみたいだ。劇が半分  
ほどストーリーをとって練習が休憩になった、葵に聞いてみるか。

「祐君どうしたの？ 怖い顔して」

「葵？ 丁度よかった！ お前の相手役誰なんだ？」

「相手役？ もしかしてキスのこと？」

そう言われた途端に、なぜか恥ずかしくなった。

「高木君だよ、聞いてない？ 私が高木君に祐君誘ってって頼んだ  
んだよ？」

「そうなんだ……聞いてなかったよ」

シヨックだった、高木が葵とキスをする……なんか腹がたつてき  
た。

俺は葵が好きなのか？ わからない、自分の事なのに。でも、葵

が高木とキスをする事に妬いているのだけは自分でもわかった。

少し風にあたろうと、ドアに手を掛けようとした時、丁度ドアが開いて人が入ってきた。

高木だった。

「よう！ 祐、やっぱ来てくれたか、ありがとよ。葵ちゃんから役聞いたか？ セリフはないって言ったけどよ、結局は補欠で何かあったら祐がやる事になるんだわ、ごめんな」

「聞いた、お前、役得だな、葵とキスするんだろ？」

「あつ！ それも聞いちまったのか？ ごめんな、隠すつもりじゃなかったんだ」

「謝るなよ、なんか……いや、何でもねえ」

謝られた瞬間に、殴りたくなった。手に力が入ったが、殴るまではいかなかった。

「どうした？ おい祐？ 怒ってるのか？」

「なんでもない、俺ちよつと用事あるから、練習ぬけるよ？ どうせ補欠だろ？」

「おい、祐！」

俺、何してんだろ？ バカみたいだ、高木に妬いて勝手に飛び出して……ガキみてえ。

今日はもう寝よう、体もだるくなってきた。

一瞬でも長く生きたい、体に無理はさせられない。

明日、高木にどんな顔して会えばいいんだろ？ 意識が落ちる前にそんな事を考えた。



## 第1話7日間の命（後書き）

はじめまして、聖司です。

ここに投稿する初めての小説になりますね。

感想、アドバイスなど、あったら読者のみなさんどんどん送ってください。

よろしくお願いします。

## 第2話見えない気持ち

9月20日

今日は朝から具合が悪い。医者からもらった薬を飲もう。

いつものように、遅刻寸前だ。急ぎながら玄関のドアを開けた先に、葵が立っていた。

「おはよ、昨日どうしたの？ 急に帰っちゃうから心配したんだよ」

「いや、用事があっただけだよ、お前こそどうした、早くしねえと遅刻するぞ」

「何言ってるの！ せっかく待っててあげたのに」

「悪い悪い、早く行こうぜ！ 本当に遅刻しちまう」

俺たちは学校まで走った、葵と二人で、少し話をしながら。

自分の体の事なんか忘れて、学校まで走った。

運動などは避けなければいけないのに、走った。

「葵！ 先に行け、俺疲れた」

「もう！ だらしないな、運動不足なんだよ、部活はいれば？」

「考えとくよ」

「それじゃあ、先に行ってるからね」

……息苦しい、無理しすぎた、もう歩けねえ。

「体力には自信あったんだけどな」

あと少しで学校に着く。いつもならすぐに着くのに、今はすごく長く感じる。

道を歩いてる人にどんどん追い抜かされる。苦しそうにしている俺を見て変な目をするやつもいる。最悪だ、助けてくれとは言わない、

だけど変な目で見る奴らが許せない。

だんだん落ち着いてきた、もう遅刻は確定だろう。でも行こう、今日を無駄にしたくない。

教室の扉をあけた、先生はいなかった。チャンスだ。

高木がいる、あんまり顔をあわせたくないな。

「おはよう祐、昨日はどうしたんだ？ 怒ってたんだよ、俺なにか変なこと言ったか？」

「いや、怒ってなんかいないよ、ホントに用事があったんだ」

「……そうなのか？ 俺に怒ってる感じしたからさ、よかった」

「そんなことあるかよ、どのくらいからの付き合いだと思ってんだよ」

また俺は高木にウソをついた、だんだん自分に腹がたってきた。ウソをつく自分、自分の気持ちを隠すウソ、なんか嫌だ。

「どうした祐？ 顔が怖いぞ」

「なんでもない、ただ自分が嫌いになっただけだよ」

「なにそれ？ 意味わかんねえよ」

「理解してもらおう気ないですよ」

普通の授業は受けている。しかし体育の授業まで受けられるほど、体力はなかった。適当な理由をつけて体育だけは休んでいる。授業中に気分が悪くなる事もある。まあ、病気のことがばれない程度にがんばろう。

高木とくだらない事を話ながら放課後を迎えた。

「今日も練習くるんだろ？」

「どうしようか？ ヒマだけど……補欠だろ？」

「劇の内容知らないと補欠もできないだろう？」

「……そうだな、行くか」

俺は何がしたいんだろう？ 補欠なのに練習に行く必要あるのか？

「どうしたんだ？ 早く行こうぜ」

「ああ……そうだな」

「あ！ 祐さ、先に行ってくれよ。俺ちよつと持ってきた物があるんだ」

「持ってきた物？ 早くしろよ？ お前が主役なんだから」

そういえばアイツ、主役だったな。

一人で体育館に行った。まだ誰も来ていなかった。俺は一人で舞台に腰を掛けていた。

「……ヒマだな、誰も来てねえよ」

一人でいると色々考えてしまう。

「！？」

物音がした。

演技で使う道具をしまっている体育倉庫から物音がした。

「……誰かいるのか？」

倉庫に入って音の原因を確かようとした。

「ん？ 祐か？ どうした？」

「風か？ お前こそ何してるんだよ」

斎藤 風沙、こいつとは小学校からの腐れ縁で、高木や葵とも仲がいい。

「なんでこんなところにいるんだよ？」

「演劇の練習の準備だよ、祐こそなにしてんの？」

「物音がしたから気になってさ」

「ふーん、そうだ丁度いいから手伝ってよ、重くて一人じゃ持てないんだ」

「みんな集まってからでいいだろう」

「今できる事は今やつとくの！」

「はいはい」

風が動かそうとしていたのは大きな背景のセットだった。女一人

で動かせるものではない。

「重！ 重いぞこれ、二人じゃキツイよ」

「男たる！ がんばれよ」

疲れた、やっと倉庫からセットを出し終えた。

「…… 凧さ、演劇やってんの？」

「舞台裏だけ、あと台本書いたの私」

「ウソ？ すぐえな、お前」

「祐は？ 役者じゃないよな。役決めるときいなかったし」

「途中から入ったんだ、補欠だけだな」

「ふゝん、祐はさ、高木に葵とられてもいいの？」

「…… いきなりなんだよ、俺は関係ないだろ」

「ウソつき」

「なんだよ…… だいいち台本書いたのお前なんだろ？」

「葵が役者やるなんてしらなかったもん」

…… 沈黙。二人しかいない体育館は、静かで、広すぎた。

「凧、どうして俺が葵の心配しなきゃなんねえんだ？」

「…… 葵のこと、好きじゃないの？」

「…… わかんねえ、自分の気持ちバラバラなんだ」

「祐さ、葵の病気知ってる？」

「病気？ なんだよ、それ」

「葵ね、あと一年しか生きられないんだよ」

「…… 冗談だろ？」

「高木も知らない、葵の両親と私しか知らないことだよ」

「本当なのか？」

凧はただうなずくだけだった。俺に聞こえてきたのは自分の心音だけだった。

「葵が明日からいなくなったらどうする？」

「そんなの嫌だ」

「明日から入院するからみんなでお見舞いに行こう？」

「……嫌だ、俺は認めねえぞ」

「葵の葬式をする、幹事を頼みたい」

「ふざけんな！ 誰がそんなもんやるか！」

「……まだわかんない？」

「……」

知らない間に、頬を暖かいものが流れていた。

「その涙は友達として？」

「……」

「違うでしょ？」

「……葵は、ホントに死ぬのか？」

「あ！ それはウソ」

「……は？」

「ウソに決まってるじゃん！ あんなに元気なのに」

「ふざけんなよ！ クソ！ ウソかよ」

涙を拭きながら裏返る声で風を怒鳴った。実際かなり情けないな。

「ありがとう、風のおかげで気付いたよ」

「どういたしまして、でも主役交代は出来ませんから」

「わかってるよ」

安心した。心のそこから。葵が病気じゃない事を、俺が葵が好きだったことを。

だんだん人も集まってきた、高木も葵も体育館にきた。みんな集まったと言う事で、舞台の練習が始まった。俺は昨日と同じく見ていただけだったが葵の演技を、見ていたいと思う様になった。

「そう言えば高木さ、なに取りに戻ったんだ？」

「ん？ ビデオカメラさ、オヤジに買ってもらったんだ。折角の学園祭だぜ？ ビデオに思い出詰め込んでおこうと思ってさ」

「おい、なに撮ってたんだよ、やめろって！ 恥ずかしいだろう？」

「いいじゃんよ、お前が俺の思い出の最初の出演者だぜ?」

悪い気はしなかった。高木の回すビデオカメラに映ることは。成人して一緒に観ればいいんだけどな。

「葵、風、ちよつと来いよ」

その後も高木はビデオを撮っていた。

今日も遅くまで練習をしていた。周りはもう暗い、他のみんなも帰り支度をはじめている。

だいたい俺たち4人は帰る方向も同じだから一緒にいることが多い。

「祐くんさ、明日の休みに遊園地行かない?」

「遊園地?」

「そう、風ちゃんも高木くんも一緒に行かない?」

「お! いいね、遊園地か、久し振りだな」

「そうね、全然行ってないわね」

「二人とも行ける?」

「もち」

「私も行けるよ」

「じゃあ決定ね、祐くんも来れるでしょ」

「ああ、行こうぜ」

家に帰った後も気分がよかった。きっと明日も大丈夫だろう。そう思って俺は約束をした。今日も疲れた。精一杯今日を生きたつもりだ。早く寝よう、明日が楽しみだ。

俺はそんな子供みたいな事を考えながらベットに入った。

## 第2話見えない気持ち（後書き）

こんにちは、聖司です。

なかなか書けませんでした。

更新速度が遅くてなんていつたらいいやら。

学校の方も文化祭ちかくてホントまっています。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0365a/>

---

命の灯火が消える前に

2010年10月12日01時36分発行